# 第6章　ソ連時代のコミュニティ観—マハッラの事例から

これまでの章で述べたように，ウズベキスタンでは約70年にわたるソ連時代を通して，現代世界でも類をみないほどの大規模な変革が進行した．社会は，大きな変容を相次いで経験してきたが，その中で社会の独自性があらゆる面で保持されてきたことも見逃すことはできない．

この変容の過程で政治，社会，文化のあらゆる領域で社会主義化を経験し影響を受けたのはウズベキスタンのコミュニティである．マハッラとよばれる近隣コミュニティが旺盛な持続力を発揮し，政治・経済的な変動にもかかわらず，地域の人々の安全と生活を支える基本的な社会組織として機能してきた．マハッラは複数の時代を通して，ウズベキスタンにおける持続的な社会発展と多元的共生を支える組織，あるいは市民社会の基盤として注目されている．さらに，マハッラの事例を通してソ連時代における人々の関係とその変容を観察することができる．

## 1.　ソ連時代のウズベキスタンのコミュニティ

マハッラはソ連時代以前から現在のウズベキスタンがある領域に存在した都市における行政単位であった．各マハッラはアクサカル（直訳は「白い髭」）とよばれるリーダーによって運営されており，そのアクサカルは，住民により選出された後，都市の支配者からマハッラ長に任命された．その職務内容は，税の徴収や命令の伝達，治安の維持，住民間の紛争の調停，孤児や寡婦の後見など幅広いものであった．ソビエト政権の誕生にともない，マハッラはその姿を大きく変えることになる．

## 1.1 ソビエト政権とマハッラの関係[1)]

ソビエト政権によるマハッラ政策は，植民地宗主国が植民地で社会の伝統的な仕組みの中から自国の目的を達成できる仕組みのみを維持させるという指摘と一致している[2)]．ソビエト政権は，二重政策を実行するために長老や住民のみならず学者や知識人を参加させ，マハッラをソビエト社会主義政府のイデオロギーのために利用しようとした[3)]．1922年，トルキスタン共和国の内務人民委員部（NKVD）が，各地域のソビエト執行委員会や革命委員会に対して，各地域におけるマハッラ住民委員会設置の「推薦文」（メモ）を送ったことが政策の出発点となった[4)]．

ソビエト政権の二重政策の過程をさらに具体的にみてみると，1923年におけるマハッラの組織化は，各地域にすでに存在していた「チャイハネ」を「赤いチャイハネ」（赤い茶店）に変え，その場をソビエト政権への理解を深めるために使おうとした．「赤いチャイハネ」には，お茶を飲んだり話したりする場所以外に小さな図書室もあった．そこには，数は限られていたものの，雑誌や本，多言語でのポスターが置いてあった．

それに加え，1924年，トルキスタン共和国共産党は「責任感がある男性」に「ガプ」[5)]（ともに夕食をとりながら世間話をする伝統的な慣習）への参加とその中で政治的議論を行うことを呼びかけた[6)]．当然，ソ連指導者は「ガプ」での議論の内容があくまでも社会主義やソビエト共産主義を支持するようなものになるよう期待していた．また，ソビエト政権は1924年に初めてマハッラの存在を認めたが，その際，ソビエト政権は各マハッラに「女性部」を設置し，地

---

1) ソビエト政権とマハッラの関係について詳しくは，ティムール・ダダバエフ『マハッラの実像―中央アジア社会の伝統と変容』，東京大学出版会，2006年参照．

2) 詳しくは，Yurii Kulchik, Andrey Fadin, and Victor Sagdeev, *Central Asia after the Empire*, London : Pluto Press, 1996, 10頁参照．

3) David MacKenzie Abramson, *From Soviet To Mahalla : Community and Transition in Post-Soviet Uzbekistan*（以下，From Soviet To Mahalla）, thesis, Indiana University, April 1998, 61頁参照．

4) Abramsonによると，この「推薦文」（メモ）が基礎となり，1932年のマハッラに関する法律成立に至る．詳しくは，David Mackenzie Abramson, *From Soviet To Mahalla*, 72頁参照．

5) 日本では「ガプ」として通用しているが（例えば，小松久男，梅村坦，宇山智彦，帯谷知可，堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』，平凡社，2005年，132頁参照），ウズベク語の発音では「ギャプ」に近い．また，タジク語では「ガシタク」として知られている．詳しくは，本書序論（関連用語の部分）と第2章を参照．

6) David Mackenzie Abramson, *From Soviet To Mahalla*, 71頁参照．

域内での女性問題を解決する機関としての権限を与えた．

ソビエト政権は1932年に「ウズベキスタンの都市部におけるマハッラ委員会に関する法律」を成立させ，各地のマハッラ住民委員会設置を完了した[7]．これにより，1938年までにマハッラに対する政権の厳しい姿勢は緩和され，マハッラがある程度の社会的な役割を果たすことが許容された[8]．

時が経過し，1959年のソ連共産党書記長フルシチョフのキャンペーンで始まった歴史の再検討により，マハッラは表面的にはさらに力を与えられた[9]．もっとも1961年のウズベク・ソビエト社会主義共和国の最高会議は，「マハッラ委員会について」という法律を成立させたものの，マハッラに実質的な権利と重要な役割を与えはしなかった．

ソビエト政権は行政を行うために，各地にソビエト議会を設け，その決議を実行するために執行委員会を設けた．マハッラは，そのような各都市の地区執行委員会の管轄のもとに置かれた．行政機関である執行委員会付属のマハッラ代表者委員会が作られ，各マハッラ代表者が月に1，2回ほど行政機関に出向き指導を受けていた．そのようなマハッラ代表者委員会は都市レベルと地区レベルでは存在していた．本来であれば，そのような委員会の目的はマハッラ代表者とソビエト政権の対話のチャンネルになるはずだったが，結果的に，ソビエト政権がマハッラ代表者を指導する場になったにすぎなかった[10]．マハッラの形成と認可も各地区の行政機関であった行政執行委員会にまかされており，その決定がなければマハッラの存在は認められなかった[11]．現在，ウズベキスタンで1万のマハッラが存在していることに対し，1961年のいくつかの都市のデータによるとマハッラの数はタシケントに270以上，サマルカンドに131，ヌクスに45，ナマンガンに42，アンディジャンに41，コーカンドに48[12]などが存

7）詳しくは，M. G'ulomov, *Mahalla-Fuqarolik zhamiiatning asosi*, Toshkent : Adolat, 2003, 31頁参照．

8）M. G'ulomov, *Mahalla-Fuqarolik zhamiiatning asosi*, Toshkent : Adolat, 2003, 31頁参照．

9）1959年の第11回党大会におけるフルシチョフソ連共産党書記長の演説や1961年に共産党が作成したプログラムでは，マハッラというよりも「地域自治」の形での国民の国家運営参加が呼びかけられた．David Mackenzie Abramson, *From Soviet To Mahalla*, 72頁参照．

10）その一例として302あったタシケントのマハッラの事例があったが，これらとソビエト政権の関係については "Makhallinskie komitety Tashkenta : Tsyfry i fakty", *Agitator Uzbekistana*, N.7, 1990, 22–25頁参照．

11）Kamilov K. "O roli makhallinskikh (kvartal'nykh) komitetov v sovremennyi period (v gorodakh Uzbekistana)", *Obschestvennye Nauki v Uzbekistane*, N.2, 1961, 59–60頁参照．

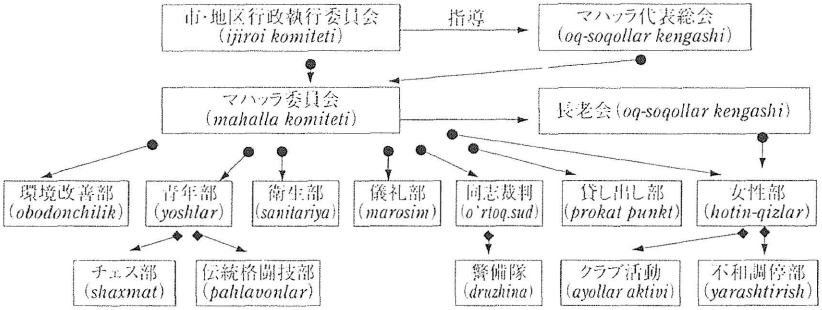


図6.1　1970年代におけるマハッラ委員会の構造（オクチャブリ40イッリギ・マハッラの事例）

在していた[13]．

ただし，図6.1のような構造が存在していたものの，各部門の違いは非常に曖昧であり，同時に複数の部門のメンバーになっていた人もいた．また，この時期のマハッラの活動は自発的なものであり，住民は参加を義務付けられているわけではなかった．そして，マハッラ委員会を構成する各部門の活動内容は，主に文化，スポーツ，地域の生活環境改善に関するものであった．唯一，政府機関との強い連携を持ち共同で活動を行ったのは「警備隊」と「同志裁判」という仕組みであり，いずれも警察，検察庁，裁判所の指導を受けていた．

## 1.2　ソ連時代のマハッラの実像

ソビエト政権はマハッラが以前持っていた社会的な役割を限定し，マハッラを政権が重要と考えた目標達成のために利用した．マハッラは住民による自治組織というよりは，ソビエト政権の目的に従う社会組織となった．この時代のマハッラに注目すると，一見昔から持っていた存在意義と仕組みはソビエト政権により破壊されたかのようにみえた．ある意味では，それが政権の狙いでもあり，マハッラは封建的な遺制にしばられた古い社会組織，あるいは否定，除

12）コーカンドのデータに関しては，Kotler Yu., "Makhallia reshaet i deistvuet", *Sovetskij Soyuz*, N.12, 33頁参照．（本文は前頁）

13）Kamilov K. "O roli makhallinskikh (kvartal'nykh) komitetov v sovremennyi period (v gorodakh Uzbekistana)", *Obshchestvennye Nauki v Uzbekistane*, N.2, 1961, 59–60頁参照．

去されるべきイスラーム的な伝統の温床として批判される場面も多くあった．

もう一方でソビエト政権はマハッラを批判しながら，国民の間にその影響力があることを認めていた．そのことから，ソビエト政権はマハッラを一時的に必要とみなし，しばらくの間は廃止せず政権のために利用してきた．しだいにマハッラの存在感は薄れていったが国家によるマハッラの利用は続いており，その目的は反宗教プロパガンダ，社会主義的な行事と生活の宣伝，ソビエト国家の活動の支持などに及んでいた[14]．

マハッラの利用価値は，住民の間にソビエト政権に関する情報を伝えられること，各地で様々な政策を効果的に実行できること，そして何より住民の意識，彼らの政権に対する見方を把握し，管理できることにあった[15]．

ソビエト政権はマハッラを厳しい管理下に置き，マハッラ内で起きていることを監視していた[16]．それは，反ソビエト的なプロパガンダの疑いのみならず，政権の初期には各世帯が庭にある作物や家畜にかけた税金を払っているかどうかを監視する目的もあった．

ある人はその恐怖を以下のように思い出し，人々が国家から間違って税金を請求されないように，家の外の木から採れる果物などは，あえて収穫しなかったと言う．

> ソ連時代のマハッラについては，人々はすべてに恐怖心を抱いていた．そんな状態で何事もうまくいくはずがない．

---

14）マハッラの反宗教プロパガンダについては，例えば，Umarkhodzhaeva O. "Makhallinskii komitet dejstvuet". *Agitator Uzbekistana*, N.17. 1987. 26頁が挙げられる．

15）マハッラの法的な地位が決められた法律としては，"Polozhenie o makhallinskikh (kvartal'nykh) komitetakh v gorodakh Uzbekistana". *Sbornik Ustavov*, 1932, N.17, 113頁；"Polozhenie ob obshchikh sobraniyakh (Skhodakh) grazhdan v sel'skikh mestnostyakh Uzbekskoi SSR utverzhdeno ukazom Prezidiuma Verkhovnogo Soveta Uzbekskoi SSR, 30 avgusta 1961". *Spravochnik aktivista-obshchestvennika: Sbornik ustavov i polozhenii samodeiatel'nykh organizatsii trudyaschikhsya*, Tashkent, 1963, 182–194頁；"Polozhenie o Makhallinskikh komitetakh Tashkenta". *Vechernyi Tashkent*, 19 oktiabria, 1990, 2頁.

16）例えば，1961年の規定によると，マハッラには金銭的な取引（喫茶，食堂，住民からの活動費の集金）を禁止しており，すべての活動を各地のソビエト実行委員会のもとで行うべきであるとされている．さらに，マハッラ総会には必ず各地のソビエト実行委員会の委員長が出席するべきとしている．"Polozhenie ob obschikh sobraniyakh (skhodakh) grazhdan v sel'skikh mestnostyakh Uzbekskoi SSR utverzhdeno ukazom prezidiuma Verkhovnogo Soveta Uzbekskoi SSR, 30 avgusta 1961". *Spravochnik Aktivista-Obschestvennika : sbornik ustavov i polozhenii samodeiatel'nykh organizatsii trudyaschikhsya*, Tashkent, 1963, 188–191頁.

例えば，どこのマハッラでも木を植えることになったので，私たちのマハッラでも同じようにした．しかし，その木は国から提供されていたため，せっかく果物がなっても誰一人食べようとしなかった．どうしてかというと，それは国の物であり，食べると泥棒になってしまうからだ．マハッラ内に木の持ち主がいないような状況になってしまっても植樹は強制的に行われていた．（証言者No. 1，ウズベク人，男性，タシケント）

マハッラや，それに似たコミュニティの組織が管理機関の機能を持っており，人々が亡くなったり，生まれたり，引越ししたりした時には住民登録の機能まで果たしていた．都市部やソビエトから離れた地域では，子どもが生まれるとその証明書をマハッラやジャモア（Jamoa - 地域社会）が発行していた．

弟は（19）45年に生まれ，両親や祖母はトゥルブコシム（Turubqosim）と名付けようとしていた．それは早く自分の足で立って歩き始めるようにという願いを込めて祖母が考え，両親も賛成した名前だった．

生後9日目に祖母が名前の登録と出生証明書（いわゆるメトリカ）をもらいにジャモアに行ったところ，その名前を付けさせてもらえなった．ジャモアの事務の女性が名前の意味がおかしいと判断し，「おばあちゃん，あなたは立派な教育を受けている人なのに，なぜこのような名前を付けようとするのですか」と言ったらしい．そして「例えばアンヴァル（Anvar）とかアヴァズ（Avaz）はどうかしら」と提案され，結局弟はアヴァズになってしまった．（証言者No. 16，ウズベク人，女性，タシケント）

この例にあるように，マハッラやコミュニティは単に形式的な手続きのみならず，人々の生活に深入りする形で関与していた．しかし，それには二つの側面があり，その一つは各コミュニティの歴史的な役割と伝統であった．もう一つは，ソビエト政権がこれらのコミュニティに求めたことである．後者に関して，前記の事例にあったように，ソビエト政権は各コミュニティ内で行われるべき作業だけでなく，新しく生まれた子どもの望ましい名前のリストまで，ガイドラインの形で決めていた[17]．

第二次世界大戦以降，ソビエト政権はマハッラに与えた権限を弱めるため，組織としての機能を減らしていった．財源を与えず，わずかな権限しか持てないようにしたのである．しかし，マハッラは存在し続け，住民のつながりを維持し生活を支えてきた．そのモラルや教育的役割，イスラーム的な慣行，近隣コミュニティに基づいた人的ネットワーク，情報の交換や助け合いの仕組みは，住民に受け継がれ，彼らの努力によって非公式の形で保持されていく．

### 1.3　住民間の交流・情報交換・助け合い

ソ連時代のマハッラはソビエト政権から公式の役割と権限を与えられなかったことで，人々の間では近所付き合いといった伝統的な情報交換や交流の部分がより強調されるようになり，それが人々の生活の中で重要な役割を果たしてきた．それはマハッラの人々の共同意識を高めさせ，地域住民としての一つのアイデンティティを構築する機能をもっていた．マハッラ住民の情報交換や交流の場としての仕組みには，「ガプ」（「ガシタク」），「グザル」，そして「チャイハネ」が挙げられる[18]．

「ガプ」とはウズベク語で「言葉」を意味し，一つのグループを構成する人々がお互いの家を訪問し，ごちそうになりながら世間話をすることである．ほとんどの場合「ガプ」は男女別に行われ，各グループには団長のような存在がおり，それは「仲間頭」（*jo'ra boshi*）とよばれる．「ガプ」のコストは，主催者のみの負担ではなく，各「ガプ」の終わり頃に，参加者の皆が少しずつ出し合い「ガプ」の主催者に手渡す．その額は主催者が用意したごちそうの額を上回り，参加者に「ガプ」への参加の関心を強化させる．しかし，お金は「ガプ」参加においては二の次である．「ガプ」への参加によって作られる人間関係は非常に強く，参加者の団結をさらに強めることが人々にもっとも重視されていることである．

---

17）社会主義時代の生活に相応しい行事の詳細と男女の名前リストの一例は，*Sotsialisticheskie obriady v zhizn'*. Tashkent : Uzbekistan, 1987, 14頁参照．（本文は前頁）

18）本稿では，使用されるこれらの「ガプ」（「ガシタク」），「グザル」，そして「チャイハネ」などの用語の中には，日本で使用される表記とウズベク語の発音との間に相違が生じているものがある．本書ではこれらを日本で通用している表記に統一している．例えば，ウズベク語の「チョイホナ」，「ギャプ」などは，本稿では「チャイハネ」，「ガプ」に統一した．

マハッラにおける食器などを保管するための施設．ソ連時代においても，各マハッラの住民はお金を出し合い，皿で儀式の際に使う食器などを購入した．

ソ連時代を通して，人々の情報交換・関係強化のための空間として「ガプ」以外に，「グザル」が存在してきた．歴史的に，「グザル」は，商店街などマハッラの住民に提供するサービスが集中する場所であった．「グザル」の重要な要素としては小さな市場があり，住民はバザール（大市場）まで足を運ばなくてもすべての日常品を手に入れることができた．また，「グザル」には人々が集い世間話をする小さな広場があった．そのような「グザル」によくみられるのは，マハッラの中心を構成する「チャイハネ」（喫茶店）である．その存在は中央アジアではよく知られており，すでに述べた「ガプ」やマハッラ集会などで重要な役割を果たしてきた[19]．

そのような仕組みに参加するのはマハッラの住民であるが，参加しなくてもマハッラ内で行われる行事へは出席できた．マハッラ内に居住していれば，行事についての情報などは全員に様々な形で必ず伝えられる[20]．行事を開催する住民が各家々を訪問して伝える時もあれば，近所の人や長老が開催日になると

19）ソ連時代におけるこれらの仕組みとその役割については，"Makhallada tarbiia", Toshkent : Yosh gvardiia, 1970, 特に16–19頁参照．

20）ソ連時代のマハッラのあり方については，Rakhimov K. "Makhalla, nachalo nachal : Obychai i sud'ba", *Nauka i Religiia*, N.9, 1989, 28–29頁参照．

大声で住民を呼び込む役割の人に伝える．それはソ連時代から特に地方でみられ，呼び込み役の人について，以下のような証言がある．

> ソ連時代の結婚式も盛大に執り行われた．朝の4時頃から，あそこの家で今日は結婚式があるとか，オシ（ピラフ）がふるまわれると言って，馬に乗った男がマハッラを駆け回って呼び込んでいた．そして，皆その家に行ったものだ．
>
> 60–70年代のマハッラは非常に良かったが，それと比べると今は駄目になっている．女性部やマンション長といった役職が作られてはいるけれど，当時はわれわれが尊敬する人がマハッラの運営をしていたので結束力が違っていた．（証言者No. 32，ウズベク人，男性，アンディジャン）

情報交換やアイデンティティの強化以外に，マハッラには助け合いの方法としていくつかの伝統的な仕組みがあった．その一つはいわゆる「ハシャル」である．「ハシャル」は同じマハッラに住む人々が互いに助け合って生活を成り立たせていくことを意味する．

「ハシャル」が行われるのは例えば近所の人が家を建て直すか，または新築する時である．同じ地域に住む人が土日を中心に集まり建設を手伝う．その代わり，手伝ってもらった住民は将来別の人が新しい家を建てる時には手伝わなければならない．

ソ連時代にも以下の証言のように，ハシャルは評価されており，ソビエト政権もマハッラの助け合いという側面を認めざるを得なかった部分が当時も新聞などで報道されていた．

> われわれには良い習慣がある．それはハシャルだ．例えば，誰かが家を建てることや井戸を掘ることなどのような非常に困難な作業を抱えているのなら，もっとも早くその人を助けに行くのはその近所の人である．それは当然無料であり，友人としての行為である．これこそがハシャルである[21]．

---

21）Kotler Yu.,"Makhallia reshaet i deistvuet", *Sovetskij Soyuz*, N.12, 33頁参照.

ただし，労働や病気で参加できない人は自分の代わりに人を雇って手伝うことができた．

「ハシャル」以外にも同じマハッラに住む住民同士の助け合いの方法は多く，それが特に様々な行事を行う際に重要になる．ソ連時代は生活が安定しており，経済的な余裕があったことから行事の規模が大きく，近所の手伝いがないと滞りなく行事を行うことは困難だった．

> マハッラはその機能をよく果たしていた．例えば，誰かの家で結婚式があれば皆駆けつけて手伝った．祝宴は規模が大きくて，例えば，オシを作る際には100キロのお米を使っていた．それだけの米を使うということは，1,000人を招待することになる（1人当たり100グラムのオシが一般的な目安である）．1,000人を迎えるのだから到底一家族では用意ができないし，親戚が手伝ってくれても（すべての作業をこなすことは）無理だ．やはりマハッラの手伝いは不可欠だ[22]．

以下の証言はソ連時代と現在のマハッラの違いを強調している．

> 当時のマハッラにとって不可欠なのは年寄りの存在だ．年寄りは多く，その存在は大きかった．また，どの家も大家族で，子どもを10人生むと「英雄の母」というメダルが贈られていた．
>
> 住民は誰かが困っていると，皆でお金を出し合ってその人を助けた．金額は決まったものではなく，各自が出し得る額でよかったし，お金でなくてもそれぞれが自発的に力になれることをしていた．
>
> 今のマハッラでは人が困っていても誰も気にしない．それが当たり前のことになっていて，本当に残念なことだ[23]．

---

22）この証言の解説としては，ティムール・ダダバエフ『マハッラの実像：中央アジア社会の伝統と変容』，東京大学出版会，2006年，96-97頁参照．

23）この証言はYさんによるものであり，その解説としては，ティムール・ダダバエフ『マハッラの実像：中央アジア社会の伝統と変容』，東京大学出版会，2006年，168頁参照．

## 2. ソ連時代のコミュニティの価値観とその変容

「ガプ」,「グザル」,「チャイハネ」,「ハシャル」はマハッラ住民が共有する価値観のシンボルであり，コミュニティの価値観の源泉である．実際，同じ価値観を持っている，あるいは，持ちたい人でない限り，同じ地域に居住していてもコミュニティの活動には積極的に参加しなかった．つまり，人々はマハッラやそこに根付いてきた伝統・習慣を通して，自分たちの生活を持続させるとともに多元性を確保しながら共生してきたと考えられる．

### 2.1 ソ連時代のマハッラにおける人間関係

多くの人は当時のマハッラにおける人間関係の良さとそれが時代とともに変わってしまったことを惜しむ．彼らからみると当時のマハッラが問題なく機能し，ソ連時代といったマハッラにとって厳しい時代を生き残ることができたのは，人々の関係の良さとお互いに対する思いやりがあったからだった．しかし，それが現在のマハッラにはみられないと，以下のように主張する人は少なくない．

> 昔のマハッラではお互いに優しさと誠意を持っていた．自分たちが持っている物を分け合って生活していた．今は何でもあるけれど，優しさと誠意がないように思う．
>
> 昔は行事があると3日間は相手の家に泊まり込んで，食べる物を持ち寄ってはいろいろな話をしながら祝ったけれど，今はそうではない．落ち着いた時代なのに優しさがないのは悲しいことだ．（証言者No. 40，ウズベク人，男性，フェルガナ州）

別の人も，当時は思いやりがあったからこそ，単にお互いが良い関係を維持できただけでなく，自分たちの住む地域を住みやすくすることができたという．その証言者によると，マハッラ住民は近所の人というより，親戚のような関係だったそうだ．

近所同士はお互いの家を訪ね合い，しばしば泊まることもあった．ある意味，これが私たちのマハッラの特色でもある．それは私たちのマハッラは歴史が非常に古くて，伝統と人々のつながりが強かったからだ．私が聞いた話だと，マハッラができた時はまだ水も電気もなく，住民の力で作り上げたそうだ．

当時のマハッラは住民が親戚のようなつながりで成り立っていた．お互いの家の出来事は自分の家の出来事で，近所の結婚式への参加は自分の家の結婚式と同じであるという姿勢だった．そうした思いやりの深いところは今のマハッラとは比べものにならない．

私はその後，別の地区のマンション型の家に引越したので，今住んでいる地域のマハッラについてあまり知らない．今でも実家がある地域に戻ると近所の人があいさつに来るし，私もマハッラの年寄りへあいさつをしに家を訪ねて行くことが多い．（証言者No. 32，ウズベク人，男性，アンディジャン）

さらに別の証言者も当時のマハッラ住民の親戚のような緊密な関係を強調し，その具体的な様相を以下のように述べた．

ソ連時代のマハッラ住民は今よりも謙虚で，マハッラ同士は他人ではなかった．それは親戚のような存在だった．お互いの家のドアは開けっぱなしで，鍵を閉めるというのはなかった．毎日ではないけれどしばしばマハッラ同士がお互いの家を訪ね合い，お茶を一緒にした．家で出せる物なんて限られていたけれど，とりあえずある物を出していた．それを食べながら楽しく過ごした．

皆優しくて，病気の人がいればその人を訪ねて様子を聞いた．教育に関しても，近所の子どもが何か悪いことをしたら住民はまるで自分の子どものように叱ったし，結婚式も皆で手伝って，相手のことを親身になって考えていた．

今のマハッラだと，自分のことだけで精一杯で，自分の問題を何とか解決しようと余裕がない．私も最近は，困ったことがあっても打ち明ける人が

いなくて一人で悩むことが多くなった．（証言者No. 26，タタール人，女性，ナマンガン）

このように，多くの人はソ連時代のマハッラの中心であり，原動力でもあった人間関係を強調する．彼らにしてみれば，それがソ連時代と現在のマハッラのもっとも大きな違いであり，ソ連時代のマハッラに対して今でも懐かしく思う部分である．その懐かしさは人々の自然な親近感とお互いに対する思いやりにあり，それは複数の世代が同じ地区に住み続け，お互いのことを知りつくし親戚にもっとも近い近所関係から出てくるものであった．そのような地域に新しい人が住み着いた場合も，その人が近所との関係を大切にすれば，昔から住み続けている人と新しく住み着いた人の融合によりマハッラというコミュニティはバランスを保つことができた．

## 2.2　伝統教育の場としてのマハッラ

マハッラの伝統的な教育は，子どものみならず大人になってからの行動にも大きく影響する要因の一つとされてきた．その教育は年寄りへの尊敬の念を持ち，マハッラや宗教的な伝統を大事にすること，男性もしくは女性としての行動とモラルなどである．それは一方的にマハッラの価値観を押し付けるものではなく，マハッラの価値観がモラルと生活を守り，そのモラルが最終的にマハッラを統合し，同じ住民としての自己認識とアイデンティティを構築するといったものである．その教育は古くから機能しており，ソ連時代にも衰えることなく住民から大切にされてきた[24]．

第三者の視点からマハッラを客観的にみてきたロシア人女性の証言者によると，マハッラにはしっかりした教育があったからこそ，廃れることがなく今に続いているのだと言う．

何よりもマハッラの力はその教育にあると思う．お年寄りへの尊敬やお互いに対する思いやりを育てるのはとても難しいことだから，小さい頃から

24）マハッラのソ連時代における教育については，"*Mahallada tarbiia*", Toshkent : Yosh gvardiia, 1970参照．

そのようなことを家庭とマハッラで教えるのに私は大賛成だ．今でもメトロやバスなどに乗ると若い人が席を譲ってくれる．

私は若い頃，ロシアに行ったことがあった．バスに乗ったらお年寄りが立っていて，若い人たちが堂々と座っていた．私が座っていた若者に席を譲るよう言うと，バスに乗っていた人皆が私をまるで敵のようにみた．それで自分がウズベキスタンに住んでいて，そこではこんなことはあり得ないと言ったが，それでも誰も立とうとしなかった．きちんとした教育をしてくれたマハッラを誇りに思っているし，教育面での貢献は大きいと思う．（証言者No. 29，ロシア人，女性，コーカンド）

もう一人のロシア人はマハッラでの近隣同士のもてなしを強調し，それがしだいにマハッラに住むウズベク人のみならず他の民族のモラルと価値観へも影響するようになったと言う．マハッラのモラルはウズベク人だけのものではなく，他の民族が共有できる部分も多くある．

ロシア人はソ連時代にはウズベキスタンの人口の50％近くを占めていたので，この土地に私たちの伝統と習慣は根付いていたし，それに従って生活していた．

私は最初にマハッラがウズベク人の心であり，その特徴を形成するところだと思った．誰かが家に来たら必ずその人の前に食べ物などをおき，お茶を飲ませ，あたたかい言葉で励ましてくれる．それは素晴らしい国民性だと思った．

私たちロシア人も長年ウズベキスタンに住み，今ではロシアのロシア人よりウズベク人に対して習慣や考え方に共通点を感じるようになっている．私たちのようなロシア人にも，現地の人の考え方や行動様式がすでにかなり自分たちの心の中に染み込んでいるので，私はロシア人でありながらマハッラの価値観を受け入れたことについて反省などしていない．それには美学があるからだ．（証言者No. 31，ロシア人，女性，アンディジャン）

マハッラ内における教育はその内で行われ，ソ連の公的な教育は学校で行わ

れた．しかし，教師の多くはマハッラに住んでおり，彼らは学内ではソ連式の教育をし，マハッラに戻ると労働に対する姿勢，年寄りに対する尊敬の念，近所付き合いの基本などを教えていた．そのような場面が証言者の記憶に多く残っている．

> マハッラで一目置かれていたのは，何と言っても先生だった．先生が向こうから来られる姿をみると，尊敬と恐怖から家の玄関のドアや木の後ろに隠れた．それぐらい遠慮していた．
>
> 困ったことに先生と結婚式の席で顔を合わせてしまうと，緊張感が体中を走り，決して不適切な行動をとらないようにした．しかし，次の日に学校で「あなたを昨日見かけたが，結婚式の手伝いがすんだのなら，すぐに帰って勉強しなさい．それとももう結婚したいのですか」と叱ることもあった．必要な時には生徒を殴ることもあったけれど，それはそれでありがたいことだったと思っている．（証言者No. 13，ウズベク人，女性，タシケント）

教師はマハッラ内で大変尊敬されていた．彼らはマハッラの地位を高めるとともに子どもたちのモラル向上に努めているとして評価されていたからである．ソ連時代のマハッラのみならず，それ以前も，また現在でも同じである．そのような教育者のいるマハッラの様子を，ある証言者は以下のように思い出す．

> 私たちのマハッラには教育者がたくさん住んでいたから，私たち生徒はマハッラを歩くことが怖かった．例えば，マハッラや家の前の掃除をしていると必ずどこかから先生がみていて，きちんとできていないと後から注意された．もちろん先生が学校に行ったり，帰ってきたりすると必ずあいさつをした．
>
> 先生が多いマハッラだったため，木を植えるなど共同作業もしょっちゅうあった．結婚式があると，当然のように皆が準備に参加して，スマリャク（春の祭りの際に大鍋で作る料理）などを料理するときもマハッラ全体でそれにあたった．（証言者No. 27，ウズベク人，女性，ナマンガン）

マハッラ内に住む人は，教師や尊敬する年寄りの目を気にし行動には注意していた．それは住民全員が同じ行動をしなくてはならないということではなく，絶対にしてはいけないことがはっきりしていたからである．お互いに対する姿勢や話し方，服装などもその枠内でなければならなかった．行動が許容を越えると，長老や尊敬される年寄りによって批判され，説教を受けることになる．

しかしこれは同時に，住民の行動を規定してしまうことにもなる．証言者の話では，第二次世界大戦中にマハッラのすべての家から誰かが戦争に動員されているにもかかわらず，自分の家族が誰も戦争に行っていないことを恥じ，自らボランティアとして志願した人がいるという．

> 私の伯父は，他の家族は誰かが戦争に連れて行かれているのに自分の家族からは誰も戦争に行っていないことを恥ずかしがって，自分から願い出て海軍で戦い，無事に戻ってきた．（証言者No. 20，タジク人，男性，サマルカンド）

こうしたことからも，住民は互いに誠意を持って接し，可能な限り問題は皆で平等に負担し，解決していこうとする姿勢が感じられる．もう一つの例は，それまでマハッラでみられなかった服装についてである．

> 私たちはマハッラではそれほど長く住んでいなかった．マハッラ住民との大きな違いは服装だった．私たちは，父がいたソ連軍部隊の派遣先だったドイツから帰ってきて，そのマハッラに住み始めた．外に遊びに行く時は，ドイツで着慣れていた服をよく着ていた．
>
> ある日，私は短パンをはいて外に出た．その格好はマハッラ住民にとってかなりショックだったようだ．彼らの中に短パンをはく人などいなかったのだから．（証言者No. 30，ロシア人，男性，アンディジャン）

マハッラのモラルは個人主義を好む人からみると侵害であり，個人の権利を奪うものであった．マハッラとの付き合いを制限し，マハッラに迷惑をかけない程度に個人の考え方で行動する人もいた．マハッラもそのような人の存在は

容認しており，彼らに力づくでモラルを押し付けることはしなかったが，その住民がモラルを完全に無視することは許さなかった．

### 2.3　民族融合の場としてのマハッラ

歴史的にマハッラの形成過程は異なっており，同じ職業の人が同じ地域に住み込みそこでマハッラを作った例もあれば，同じ民族が同じ地域に住んでマハッラを構成した人々の例もある．しかし，ソ連時代になると，そのようなはっきりとしたマハッラ間の区別は薄くなり，ほとんどのマハッラが多民族のものになった．

以下のように，ウズベク人以外の人がマハッラの中心になっていたこともあった．

> 私は10歳までロシア式のマハッラに住んでいた．マハッラはそもそもアジア的な概念だと思うが，そこには様々な民族が住んでいた．子どもの頃は民族という概念をよく理解できず，だいぶ後になって言葉の意味がわかるようになった．
>
> 私たちのマハッラでは比較的ウズベク人の家族が少なく，どちらかというと非ウズベク人が多かった．記憶に残っているのは長老の存在である．誰かが家でケンカをしていると，長老が訪ねてきて長時間説教をした．また，お祝い事があるとマハッラの全員にご馳走が配られた．
>
> 1966年の地震で，マハッラの住民が都市に引っ越すことになり，離れ離れになった．私はチランザル（タシケントのロシア人が多く住む地区）に住み始めたが，そこではマハッラという言葉をしばらく聞かなかった．再び聞いたのは最近のことである．マハッラ関係者が年寄りへの支援や不仲の家庭に対する手伝いをしているそうだ．
>
> 今のマハッラは当時よりも多くの機能と権利を持つようになった．行政機関の場所が遠くて，マハッラはすぐ近所にあるから良いことだと思う．何か問題が起こったら解決する機関が近くにあった方が便利に決まっている．（証言者No. 6，タタール人，女性，タシケント）

ウズベク人が主体となって構成されていたマハッラでも複数の民族が混ざり

合い，それぞれのマハッラがこれまで持っていた伝統や習慣の上に，さらに独自の文化を構築し始めた．そのような多民族性が住民の一体化やマハッラに対する誇り，そしてマハッラへの積極的な参加を脅かすことはなかった．ウズベク人が圧倒的に多い現在のマハッラより，ソ連時代の多民族のマハッラの方が一体感が強かったという意見もある．

> 子どもの頃はいつもマハッラ内を走り回って遊んでいた．ウズベク人もロシア人の子どもも一緒に遊び，お年寄りも子どもによく注意していた．マハッラ内の団結心は見事だったが，今ではそうした雰囲気はない．
>
> 〔ソ連の解体後〕ロシア人が国に帰ると，その空き家を買って豪邸を作るウズベク人が増えてきた．彼らは自分の家を他より豪華で違うように建てたがる．誰とも関係を持とうとしないし，自分のことばかりで孤立している．人々の関係とマハッラはずいぶんと変わってしまった．（証言者No. 9，ウズベク人，男性，タシケント）

ソ連時代のマハッラにはウズベク人とともにロシア人や他の民族が数多く住んでおり，彼らにとってマハッラはウズベク人と同様に大切なものだった．その一方で，マハッラが存在しない市街のアパートに住む人も少なくなかった．ウズベク人やタジク人，カザフ人などはアパートへ移ることを嫌い，一戸建ての家を構えてマハッラに住んでいた．1966年にタシケントで起こった大地震の時でさえ，ウズベク人は新しく作られたアパートではなく，自分たちのマハッラに住み続けた．

ロシア人やロシア式の生活を好む人は，マハッラの伝統的な生活スタイルでは，ガス，電力，水道が完備されていないため新市街に住んだ．彼らからみると，マハッラは理解しにくく，自分たちとは関係がないものであった．以下の証言はそうしたことを物語っている．

> マハッラという言葉は私が住んでいた新市街地では馴染みがなかった．当時のタシケントはムスリムが住んでいた旧市街地とヨーロッパ人が住んでいた新市街地に分かれていた．

ムスリムにとってマハッラは意味があったのかもしれないが，私たちにとってはそれほど強い影響力はなかった．私の地区でもマハッラ委員会があったのかもしれないが，彼らの活動はまったく目立たず，その存在に気付く人は少なかったと思う．しかも今のように生活支援を必要としている人がいなかったため，マハッラ委員会の役割は必要とされていなかった．

ムスリムの地区では葬儀の方法などが異なっているので，また違ったと思う．私たちはそうした特徴を理解していなかったので，あまり深入りはしなかったけれど，少しずつムスリムのお葬式に参加するようになり，大勢の手伝いが必要で，住民同士が助け合っていることを知った．例えば，ムスリムのマハッラでお葬式や結婚式があると，個人宅で椅子や机，行事に最低限必要なものを備えておくのは無理なので，マハッラ全体で購入して皆で使っていた．

また，マハッラ委員会は必ずしも委員会として組織化されていなくてもよかった．長老や年寄りについては皆知っているので，必要な時に相談に訪れていた．マハッラ委員会とよばれてはいても事実上は個人のことを指しているようだった．（証言者No. 21，ロシア人，女性，サマルカンド）

## 3. ソ連崩壊とコミュニティ

ソ連の末期，ペレストロイカの時代に入ると，しだいにマハッラの機能やそれが体現する価値観の再検討が行われるようになった．その結果，マハッラはいわば社会への復帰を果たし，ソ連からの独立はこれにさらなる弾みを与えた．最初に注目されたのは，民族的あるいはイスラーム的な価値観が生き続ける場としてのマハッラであり，その復興は大統領や政府のみならず，民族主義的知識人によっても支持された．マハッラはそれ自体がウズベク文化の独自性の現れであり，ソ連時代の抑圧にも耐えた，守るべき伝統だったからである．

しかし，やがて政府はマハッラがウズベク人の社会文化的な伝統であることよりも，むしろそれが民族間対話を促し，社会を安定させる側面を強調し始めた．その狙いは，独立直後の社会にみられた民族間関係の緊張や生活水準の低迷，人々の不満や不安をマハッラという伝統的な仕組みを通して緩和・安定さ

せることにあった．そのため，政府は非公式のコミュニティであったマハッラを組織化し，各マハッラに運営委員会や一定の予算，人材，任務を与えるようになった．そして，国の経済状況の悪化と政治環境の緊迫化，とりわけイスラーム過激派の出現によってその任務は増え続け，最終的にマハッラは非公式な隣人ネットワークから「公式」の社会単位となったのである．図6.2は，現代のマハッラの構造を示したものである．

このようなマハッラの公式化のプロセスは，次の三つの段階に整理することができる．

**第1段階　政府によるマハッラの認知**：独立直後の1992年9月，大統領令によってウズベキスタン・マハッラ博愛財団が設立された．政府は伝統的な相互扶助組織としてのマハッラを公式に認知し，特に社会的弱者に対する支援機能の強化に着手した．

**第2段階　マハッラの治安・警備機能の強化**：イスラーム過激派の出現やテロ活動に対して地域社会の治安を強化するために，1999年マハッラ・ボスポニ（自警団）が設立された．

**第3段階　自治行政組織としてのマハッラの機能強化**：政府は2003年を「マハッラの年」と定め，以来その複合的な機能の強化を進めている．

現代のマハッラの特徴としては，それが独立して存在するわけではなく，むしろ，他の政治・経済・社会・文化的な組織や仕組みと密接に関連しながらウズベキスタン社会を構成していることが挙げられる．マハッラへの帰属意識も，

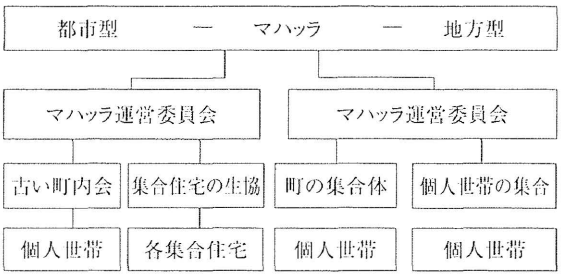


図6.2　ウズベキスタンの地域社会内構造
都市型と地方型のマハッラ

程度の差はもちろんあるものの，多くの人々のサブ・アイデンティティを形成しており，国家や民族，地域，宗教などを単位とする他の主要なアイデンティティと矛盾することなく共存している．しかも，近年，ウズベキスタン社会の構造的変容にともない，マハッラもその役割を少しずつ変化させている．

### 3.1　生活支援の制度

第一に，マハッラ運営委員会からの経済的支援（給付金や食糧の提供など）は，人々がマハッラの存在意義を認め，支持する上で重要な要因であるだけではない．それは，地域共同体内における経済的な相互扶助を促進し，結果としてウズベキスタン社会の安定に少なからず寄与している．マハッラによる支援の仕組みは，図6.3のように示すことができる．

このような住民の支援制度の導入はマハッラ独自の論理を基盤としており，同じマハッラ内に住む人はその地域で誰がもっとも支援を必要とするのか，その人にどのような支援が必要なのかを行政機関の人よりよくわかっているという前提に基づいている．さらに，その支援を行う際には，同じ地域の住民に対して，行政機関よりマハッラ委員会の方がより誠意を持って支援を行うであろう

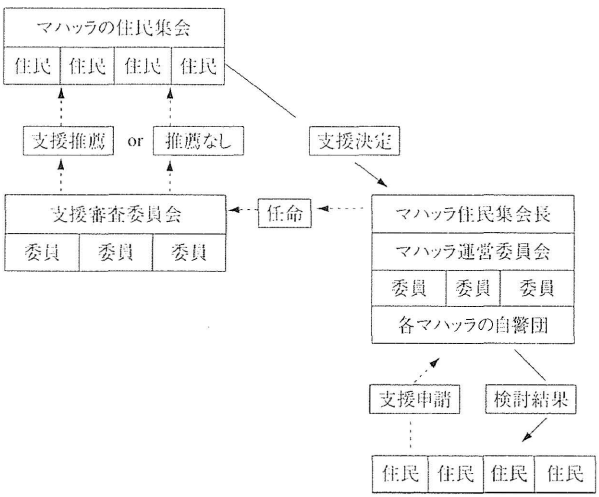


図6.3　マハッラの支援提供制度

という認識も前提にある．

しかし，現状ではこのようなマハッラの公式化は必ずしも期待された結果に至っていない．それにはいくつかの理由があり，その中でもやはりマハッラに国家予算から与えられる財源が限られていることや，支援を必要とする人の数に際限がないことが挙げられる．そして，その支援を決める過程ではどのような人物がマハッラ委員会に入っているのかも関わってくる．非公式で効果的な仕組みとして機能してきたマハッラは，公式化され国家行政機関の管理下に置かれることになるが，その後も同じような効果をもたらすことができるのか，住民から疑問視する声が多く聞こえてくる．

> 現在のマハッラが良いとか，悪いとか言う前に，生活面について一つ例を挙げると，私の下の階にはおばあさんが住んでいる．彼女の生活は苦しくて（経済的に）困っている．私たち近隣住民のところにも来て，何度か自分の状況を説明して帰ったこともあった．私たちは彼女のためにできる（ご飯や服を分けてあげる）ことをしてあげた．
>
> しかし，彼女の生活を少しでも良くしようとマハッラ（委員会）が手伝っているところをあまりみたことはない[25]．

ソ連時代のマハッラでは，人々の関係が深く，困っている人への対応も早かった．このような状況は，自発的な支援と近所付き合いで成り立っていたことがわかる．

公式化されたマハッラではその規模が大きく設定された上に，マハッラの職員は必ずしも近所に住んでいる人に限らず，広範囲の地域を管理しなければならない．公式化されたことで行政機関の下請け機関になり，マハッラ委員会で働く人も伝統的なマハッラの長老とは異なり，「職員的な存在」になってしまった．

ソ連時代の伝統的なマハッラの長老や彼を手伝う人にとっては，住民の生活

---

25）この証言は2004年から2006年のマハッラに関する調査の一環として得られたものである．この調査の詳細や回答者のデータに関しては，ティムール・ダダバエフ『マハッラの実像―中央アジア社会の伝統と変容』，東京大学出版会，2006年，6-7頁参照．

を助けることは「仕事」ではなく伝統的な「使命」であったが，公式化されたマハッラの職員にとっては，それは単なる仕事に過ぎず，しかも，給料は非常に少なかった．そうしたことが以下の証言から読み取れる．

> 私は今でもマハッラであまり用事を作らないようにしているが，1，2回行ったことがある．その時感じたのは，マハッラを良くするには非常に多くのことをしなければならないということだ．当然，その活動の目的は人々の生活を良くすることでなければならない．例えば，母子家庭や低収入の家庭に対する支援の必要性であるが，現状は困っている人が自分でマハッラに行って，「私はとても困っていて，生活状態は悲惨だ」と訴えないかぎりマハッラは動かない．
>
> 職員の多くはお金（賄賂）で動くとも聞いた．山のような枚数の証明書を持ってくるように言われることもしばしばあるので，証明書1枚もらうのにもお金（賄賂）を払うことも珍しくないそうだ[26]．

### 3.2　行政としての生まれ変わり

独立後のマハッラの主な財源は国家予算から来るようになり，その使用に関しても国家機関に対する説明義務が生じている．マハッラが国家機関を通して財源を確保できるようになってから，マハッラのこれまでに果たしてきた役割とその形も変わった．ソ連時代の非公式で国家機関とそれほど関係を持たなかった仕組みから，行政機関の様相を持つ機関に生まれ変わりつつある．

その役割には様々なものがあり，例えば，住民の在住状況の確認（空き家の有無，住民登録など），行政サービスの支払いの管理，治安の維持などである．それに対しては，住民の間で意見は大きく分かれる．マハッラの役割の強化と多様性から得をする人もいれば，そのようなマハッラの変容を評価しない人もいる．さらに，マハッラの仕組みをそのように行政機関の下請け的な存在として使うことを嫌う人も少なくない．

以下のように，マハッラの役割強化を評価する人は，自分たちの生活の支え

---

26）この証言はYさんによるものであり，それについては，ティムール・ダダバエフ『マハッラの実像—中央アジア社会の伝統と変容』，東京大学出版会，2006年，168頁参照．

になっていることからその変容を歓迎する．

> ソ連時代のマハッラはあまり目立たなかった．当時の体制の中身から言うと，マハッラに行って問題を解決するより行政機関や共産党の支部に行った方が効果はあった．
>
> 今のマハッラの強化は，良いことだと思う．他の行政機関よりもマハッラの人の方が各地の事情に詳しいし，より公平な判断ができるであろう．例えば，私の娘は半年前から彼女が所有するアパートに住んでいないため，そのアパートの住民税を払わなくても済むようにマハッラから（娘がもうそのアパートに住んでいないことを）証明をしてもらい，マハッラ委員会がそれにハンコを押してくれた．マハッラではなく行政機関であれば紙（書類）集めで大変だったと思う．（証言者No. 1，ウズベク人，男性，タシケント）

マハッラの新しい役割を評価する人はその運営方式も変わり，それに多くの人が関わっていることも強調する．伝統的なソ連時代のマハッラでは複数の長老が存在し，彼らがマハッラの様々な問題に取り組んできた．現在ではマハッラ代表の姿もその役割も多様である．代表には人生経験が豊かな年配者のみならず，若い世代や女性からも代表が選ばれ始めている．あるマハッラの長老に言わせると，そのような変容はマハッラの社会内の新しい位置付けを明確にし，将来的にコミュニティ内のすべての問題がマハッラ委員会により解決されていくと強調する．

> ソ連時代のマハッラはどちらかと言えば非公式な組織であり，例えばマハッラの長老を選び，皆で結婚式やお葬式などのことを話し合っていた．誰かの家でケンカがあると，その人の家に行き，仲介をしていた．
>
> 現在はマハッラの中身が変わった．例えば500世帯以上のマハッラの場合，その代表と相談役には給料が支払われて，マハッラのポスボニ（自警団）が導入された．やはりマハッラは少しずつ非公式なものから何らかの形を持った公式な組織に変わりつつある．これからはマハッラの重要性が増し，将来的にマハッラは住民のあらゆる要望に応えられる組織にならなけれ

ばならない．

私がこのマハッラの代表になってからは誰一人としてガスがない，水がないと文句を言ったことはない．それはマハッラ内で対処できているからだ．今後，地方自治体の役割も減少し，人々はあらゆることをマハッラに頼るようになると思う．（証言者No. 1，ウズベク人，男性，タシケント）

確かに，マハッラの執行部の多様性は，財源とキャパシティが限られているマハッラの仕組みに新たなダイナミズムと活力をもたらしている．しかし，以下の証言からもわかるように，リーダーシップの交替だけでは，現代のマハッラが抱える多様な課題を解決できないことも明らかである．

マハッラを高く評価する意見に反論する人は，マハッラが単純に国家機関の一部になってしまい，住民の利益追求ではなく，国家機関が本来果たすべき役割を放棄し，マハッラに押し付けているだけだと言う．ある証言者は最近のマハッラ職員の仕事ぶりを以下のように語る．

マハッラの職員の最近の関心は，誰が公共サービス料金を払っていて，誰が払っていないか調べることに集中している．しかし，誰かが生活に困っているからといって自発的に手助けしようとする職員を私はいまだにみたことがない．（証言者No. 9，ウズベク人，男性，タシケント）

ある人は，そのような行政としての仕事はマハッラの意味を変えてしまい，人々の関係も悪くする，ソ連時代のマハッラの良さは行政サビースの一環としてではなく，近所付き合いの中から生まれる暖かい気持ちであると言う．

マハッラの特徴の一つに人々の圧倒的な信頼感があり，近所の家のドアはいつも開いていて自由に行き来していた．それがマハッラの役割を行政機関が果たすようになってからは，そのような光景をあまりみかけなくなった．（証言者No. 37，ウズベク人，女性，タシケント）

もう一人の証言者も，独立以降のマハッラが強化されても，それが人々の信

頼強化などにつながっていないことを以下のように話す．建物の外見からしてもマハッラが国家行政機関になりつつある状況を以下のように残念がっている．

> カリモフ大統領の時代にマハッラはある程度自治を始め，「自分の土地は自分で守れ」というスローガンを聞くようになった．しかし，アンディジャン（2005年に市内で国軍と政府に反対する勢力が衝突した）事件のようなことが起き，どこに行っても建物は窓だけでなく，周辺までも鉄の柵で囲んで，人々の出入りを制限した．反対勢力から建物を守るためだ．
>
> それは外見的にも良くないし，それまでしていたようにマハッラの建物の周りに木を植えることや，すでに少しずつ大きくなっている木を育てていくことができなくなった．これはソ連時代から続く恐怖と，人々に自由がないことの現れである．（証言者No. 33，タタール人，女性，アンディジャン）

ソ連崩壊後に役割と権限が強化されたマハッラの評価にこのような否定的な様相がある理由の一つは，マハッラと国家行政機関の間に役割の分担がはっきりみえてこないことがある．それが腐敗やマハッラの活動への様々な悪影響を与えているといわれている．

> 今のマハッラは（非国家組織と言いながら）国家の一部になってしまったが，国家機関との関係が不明確だ．もしマハッラが国家機関の一部であればそのようにはっきり言えばよいし，住民機関であればそれもはっきりするべきだ．
>
> 私たちのマハッラの主な仕事は（住民の利益を守ることでなく）次々と理由をならべては，住民からお金を集めることだ．昨日，ガスパイプを修理するためだと言って集金に来たけれど，今日になって今まで来ていたわずかなガスすら来なくなった．その前も，よく停電になったので，電気がちゃんと使えるようにインフラを修理すると言ってお金を集めたが，その電気もまったく来なくなっている．私はもう失望している．マハッラは不要だと思う．
>
> こうしたサービスは，マハッラではなく以前のように国家行政機関が行う

べきだと思う．そうじゃなければ，国家行政機関や郡のホキミアット（役所）などはなぜ必要なのか？　こうして私が話している今，彼らはいったい何をしているのか？　彼らの役割が何なのかさっぱりわからない．（証言者No. 9，ウズベク人，男性，タシケント）

もう一人の住民はマハッラの活動を以下のように批判する．

マハッラ委員会の活動を私は実感できないでいる．例えば，私が住むマンションには6階までの高さに育った大きな木があり，その葉っぱは風が吹けばあちこちに散らばり，住民は迷惑していた．

私は行政機関にもマハッラにも何度も助けを求めたが，マハッラ委員会は何の手助けもしてくれなかったので，結局自分たちで木を切ることになった．こちらが願い出ても無視するのだから，どんな活動をしているのかよくわからない．（証言者No. 41，ウズベク人，男性，フェルガナ州）

マハッラ委員会が提供する支援もあったようだが，マハッラに権限が集まる一方で，財源が集まらないことから，職員の間に不正が多くみられ，腐敗は日常的なものになっているという意見がある．

今のマハッラ（事務所）に座っている全員がお金（賄賂）をもらっていると言える．その理由は，給料が少なくて生活していけないからだ．

彼らが低収入の家庭を探して支援したなんていう話を聞いたことがない．支援をするのは彼らの知り合いか，高いポストで仕事をしている子どものいる家庭ばかりだ．その家の子どもたちに気に入られて，自分の用事を済ませることができるからである．将来にわたってお金をもらうためで，お金を渡さないと何もしてくれない．要は，それさえ渡せばすべての問題が解決できるということだ．（証言者No. 46，タジク・ウズベク人，男性，ブハラ州）

このような否定的なイメージから，ソ連時代以降に生まれ変わり新しい機能を果たし始めたマハッラに対する愛着は弱くなり，それを拒否する人もまた少

なくない．彼らは，本来，国家機関が果たすべき役割をマハッラではなく，従来の行政機関が果たすべきであり，マハッラにはその能力も財源もないと考える．その意見を象徴するのが，以下のウズベク人でマハッラ在住の人の証言である．

> 私からみると，ソ連時代のマハッラと今日のマハッラは形が変わったものの，いずれも受け入れがたい存在だ．私はその存在そのものを拒否していて，不要だと思っている．今，マハッラ内ではコネや収賄が盛んで，個人的な利益がないとマハッラ長は動こうとしない．
>
> ソビエト政権時代のように，すべての公共サービスやマハッラ内の出来事に関しては行政が責任を持つべきだと思う．ソ連時代のマハッラは完全に住民の力で動いていたが，大して問題を解決していたわけではなかった．例えば，どこかの年寄りが病気だったりするとマハッラのメンバー3人がその人の家に行き，健康状態を尋ねた．もし低収入で支援を必要としている人がいれば，マハッラ長か住民が出し得る金額を集めて，その家に持って行ったくらいだった．それくらいの役割がちょうどよかったんだ．（証言者No. 4，ウズベク人，男性，タシケント）

特にソ連時代からマハッラに頼ることなく，ある程度の距離を置いてきた人からみると，変容したマハッラとの付き合い方は一段と難しい．彼らはそもそもマハッラというコミュニティの生活に慣れていないため，その論理を理解するのに苦しむ．当然，現代の行政機関の機能も兼任するマハッラは受け入れられないと言う．

> 私たち家族は行政機関にはよく行っていたが，マハッラに行った覚えはない．結婚式の手伝いで倉庫からコップや椅子，テーブルを借りることはあったが，そういうことは家族で力を合わせてしていた．だからマハッラの手を借りたことはなかった．私はソ連時代も今もマハッラの力を必要とは感じない[27]．

## ま と め

以上のように，ソ連時代のマハッラの非公式で人々の伝統的なつながりに基づいていたものに対して，現在のウズベキスタンではマハッラの「公式化」が着実に進んでいる．これを推進する政府の狙いは，行政機能の不足を補うためにマハッラを組織化し，様々な課題を住民レベルで解決することである．また，住民の努力に依存することによって政府の出費を抑え，少ない予算でより多くの結果を生み出すことを意図している．政府の論理に従えば，住民も得るものが多いということになる．また，治安の安定化においてもマハッラの役割は大きく，政府はこの分野でもマハッラに期待を寄せている．しかし，このような「公式化」，「組織化」政策には，いくつかの問題が存在する．

第一に，マハッラと国家の関係が不透明である．マハッラがソ連時代を生き延び，その伝統的な機能を保持することができたのは，マハッラが政府とある程度距離をおき，住民の自発的参加で成り立っていたからである．現在の「公式化」されたマハッラは，マハッラ運営委員会が運営機関となり，住民の権利を保証する住民自治組織である．しかし，マハッラ運営委員会の選挙，政策決定，活動においては政府の介入が存在しており，マハッラ運営委員会は住民自治組織というよりは国家の請負機関であると誤解されることがあるのも事実である．マハッラ運営委員会と政府・地方自治体の関係を明確化することが求められている．

第二に，マハッラ運営委員会の法的権利と自立が整備されたとはいえ，マハッラの財政的自立にはまだ至っていない．なかでも，マハッラ運営委員会の予算は国家予算から支出されることから，マハッラ運営委員会は政府の介入を阻止することができない．その上，マハッラが国家予算から支給されている財源とマハッラが達成するように要求されている任務との間には明らかな差がある．ここで重要な点は，そもそもマハッラはあらゆる問題を解決できるような仕組みではないことである．また，政府・自治体は選挙など様々な分野でマハッラ

27）この証言は2004年から2006年のマハッラに関する調査の一環として得られたものである．この調査の詳細や回答者のデータに関しては，ティムール・ダダバエフ『マハッラの実像—中央アジア社会の伝統と変容』，東京大学出版会，2006年，6-7頁参照．（本文は前頁）

運営委員会に対して指導を行っている．このような状態が続くならば，住民のマハッラ運営委員会，ひいてはマハッラに対する考え方に悪影響を与えるだろう．

第三に，マハッラに対する住民の見方には相違が存在する．住民のマハッラに示す姿勢や参加の仕方は決して一様ではない．マハッラの仕組みはその選択権を住民に与えてきた．古くから，マハッラへの参加が自分の利益につながる，あるいはマハッラが自分のサブ・アイデンティティの一部だと考えた人はマハッラに積極的に参加したが，そうでない人には参加しない自由があった．しかし，政府によるマハッラの「公式化」と「組織化」が進むと，マハッラの決定はすべての住民の生活に関わるようになり，マハッラに参加するか否か，また，その参加の程度について住民の選択権がなくなる恐れがある．特に，近年マハッラ運営委員会が福祉事業や様々な監査機能を担うようになると，マハッラ運営委員会と行政機関との差はあまり感じられなくなった．多くのマハッラ住民は，そのような「公式化」政策が古くから自発性に基づいていたマハッラのイメージを悪化させる可能性を指摘している．

このような課題がある以上，マハッラの将来を予測することは容易ではない．しかし，現在のマハッラ運営委員会の機能がどのように変化するにせよ，近隣住民の付き合いと非公式な人的ネットワークに基づいた相互支援は，現代化の影響を受けることはあれ，将来も消え去ることはないと思われる．隣人関係で成り立つマハッラのもたらす一体感は，歴史的にその形を変えつつも維持されてきたのであり，これからも存在し続けるに違いない．